

【共同討議】

「デモクラシー」を論じる

——プラトン『国家』の解釈をめぐって——

提題者：内山勝利（京都大学名誉教授）

坂井礼文（神戸大学・学振 PD）

司会：松田 毅（神戸大学）

21世紀も20年が経過しようとするいま、第二次世界大戦後の国際政治と経済のレジームがようやく揺らぎ始め、「先進国」でもこれまでなら予想できなかった、様々な擾乱が生じている。たとえば、アメリカのトランプ大統領が象徴する「ポスト・トゥルース」の状況は、哲学的観点からも無視できない事態にわたしたちを追い込んでいると言えるかもしれない。この現状をどのように捉え、発言するべきだろうか。それは「デモクラシーの危機」なのか。そもそも「デモクラシー」とは何であり、何であるべきか。このような問いは、哲学に突きつけられた重要な課題として共同で討議するのがふさわしい。

「デモクラシー」を問う、この討議の手掛かりを、哲学の古典中の古典である、プラトンの『国家』に関する政治哲学的解釈に求める。『国家』を「政治の書」として読解する、『プラトン『国家』逆説のユートピア』（岩波書店2013年）の著者、内山による「国家建設」の解釈に対して、『無神論と国家』（ナカニシヤ2017年）の著者、坂井が、レオ・シュトラウスのプラトンの『国家』篇の解釈に基づき内山に対論を挑む。それを受けて、わたしたち会員のあいだでの討議を深めたい。以下が内山と坂井の報告要旨（予定）である。

「逆説のユートピアと民主制（デーモクラティア）」内山勝利

プラトン『国家』は逆説の限りを尽くして《理想的》な国家像を描き出している。もともとその作業は、この途方もなく多面的な著作のある断面にすぎないかもしれない。少なくとも、この長大な対話篇において「国家」建設という大構想を促したのは、われわれ各自の生がすぐれた倫理性に支えられてあることの意味を吟味することを眼目として、とりわけ「正義」という徳目のあり方を国家という大きな図柄にうちに「大きな文字で書かれているところを見て取る」ためであった。その意味では、この著作の焦点は国家と政治によりもむしろ倫理に当てられている、というべきかも知れない（ただし、プラトンはけっして政治と倫理をアナロジカルに類同化して論じているわけではない）。その点を留保しつつ、しかしここでは、拙著『「国家」逆説のユートピア』がそうであったように、本書を「政治の書」として読み解くことを議論の場としたい。

ソクラテスによる国家建設に対しては、人間的現実を無視し、およそ不可能な前提の積み重ねの上に遂行されているという批判が、すでにアリストテレス以来繰り返し言いつつ

られてきた。ソクラテスの挑発的な提言を表層的には是認することはかえってその真意を空洞化することにもなりかねないが、彼の国家建設が常に人間の「自然本性」を基盤にしたものであることには注意しておくべきであろう。そしてこの国家において、大多数の一般国民に対しては強固な画一的統制が敷かれることはなく、むしろ彼らの間に存する人間的多様性は当然のこととして国家建設の前提条件としてあるがままに受け入れられている。国家による恣意性にもとづいて現実を裁断し、既定の枠組みの中に画一的に押し込もうとする全体主義的性格は、この国とは無縁である。厳しい制約の下に置かれるのは、国家の指導者階層だけである。

ただし、この国家建設において《政治過程》は捨象されている。いわゆる「哲人王」とは、その理想を実現するための「最小限の変革」というアイロニカルな言い方で、しかし現実にはおよそ実現を期待し得ないこととして提出された方途であり、実質的にはその問題を棚上げにすることを意味している。

プラトンが専門的なエリート集団による国政の主導を志向していたことは確かであり、それとの対比においては、民主制はむしろその対極にあるものと位置づけられるほかない。しかし、現実政治の場においてはそれがむしろ大きな効用をも持っていることをも彼は積極的に論じている。プラトンの政治思想を考察するためには、その点を、特に『政治家』における議論から見て取り、重ね合わせて論ずることが必要不可欠であろう。

「シュトラウスによるプラトン『国家』の解釈 ——内山勝利氏による読解との対比」 坂井礼文

本報告では、21世紀を生きる我々がデモクラシーについて考える手がかりとして、プラトンの『国家』を参照するにあたり、20世紀の思想家であるレオ・シュトラウスがこの古典中の古典をどのように解釈したか、内山氏による読解との比較検討もふまえて検討したい。プラトンがデモクラシーを批判し、哲人王による統治を唱えたことはよく知られているが、今日を生きる我々からすれば、そのことだけでなく、『国家』はあまりにも実現困難な提案を多く含むように思われる。例えば、内山氏が『プラトン『国家』逆説のユートピア』の中で指摘しているように、哲学者が国の指導者になるにあたり、少年期より数学・体育・音楽・詩を学び優秀な成績を収めることに加え、従軍して見物を行ない、20歳から30歳まで、そしてまた35歳から50歳まで軍務に就くべきであるとする第7巻の記述や、彼らが妻子の共有までも義務付けられた。このような内容を間の当たりにして、我々は驚きを通り越して、茫然とせざるを得ない。

周知のように、デモクラシーこそが唯一の正しい政体であると考えられるようになり、普通選挙の制度が世界的に広まっていったのは20世紀のことであった。同時に20世紀は共産主義やナチズムなどの全体主義がはびこった時代でもあり、そこではデモクラシーと全体主義の対立的構図が見られた後、前者がリベラリズムと結び付くことで勝利したと考えられがちである。このような単純化された図式に基づいて書かれて一躍有名に

なったのが、フランシス・フクヤマの『歴史の終わり』（1992年）であった。

しかし、そもそもデモクラシーとは何か。この語を「民主主義」と訳せば、我々の耳に心地よいが、デモクラシーとはもともと民主制という一つの政治制度に過ぎず、それ自体は積極的な側面と消極的な側面を持っている。その消極的な面について一例を挙げれば、ギリシャ人にとって民主制は大衆迎合とデマゴグに彩られた不安定な体制であり、大衆政治あるいは今日風に言えばポピュリズムへと容易に転化するものである。

シュトラウスもまた我々と同様にデモクラシーこそが善であり、唯一の正しい政治体制であるとする風潮の中でプラトンの『国家』を読み直そうとしていたことから、彼の解釈は我々にとって示唆的な内容を多く含むはずである。シュトラウスの著書の中でも、『都市と人間』を本報告では主に参考にしつつ、『国家』をどのように解釈していたか考察していくことで、今日においてこの書物がどのような意義を持つのか問うてみたい。その過程において、内山氏との解釈の相違点および共通点にも触れていきたい。